

國學院大學學術情報リポジトリ

2021年度国際研究フォーラム「日本の宗教文化を撮る」報告書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-05-21 キーワード (Ja): NDC8:161.3 キーワード (En): 作成者: 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001631

はしがき

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所 所長

平藤 喜久子

誰もがカメラを持ち歩き、カメラに撮られる日常を送っている。ほとんどの人々が、折に触れて写真を撮り、カメラに写り込んでいる。街には防犯カメラも溢れており、車にもドライブレコーダーという名でカメラがついている。撮り、撮られることは、意識せずとも日常になっている。

本報告書は、2021年12月に國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所の主催で開催された国際研究フォーラム「日本の宗教文化を撮る」における議論をまとめたものである。

2014年にInstagramの日本語サービスが開始され、2017年には「インスタ映え」が流行語大賞を撮った。だれもが写真を撮って発信するようになった時代に、私たち研究者はどう撮ることに向き合っていく必要があるのか。何を知る必要があるべきなのだろうかと考えるようになった。

1980年代、ジェイムズ・クリフォードら文化人類学者たちは「文化を書く」という行為をめぐる議論をした。研究者は学術的な行為として「書く」ことを行う。客観的に記述しているつもりでも、そこには書き手の意図が否応なく紛れ込んでしまう。書き手と書かれる側の関係、言語の違いも書くときには影響を受ける。では、「文化を撮る」ことはどうだろうか？写真は「真を写す」と書き、あたかも客観的で真実を写しだしているように思われる。しかし、同じ場所であってもまったく同じようには撮れないように、実は撮ることもさまざまな思いや条件の制約を受けるのではないだろうか。

こうした問題意識のもとに構想されたのが、今回の国際研究フォーラムである。この議論をきっかけに、「撮る」ことの危うさと魅力を感じて頂けると幸いである。